

読書力検定

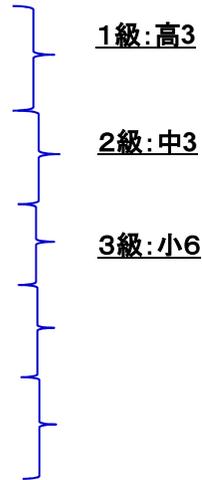
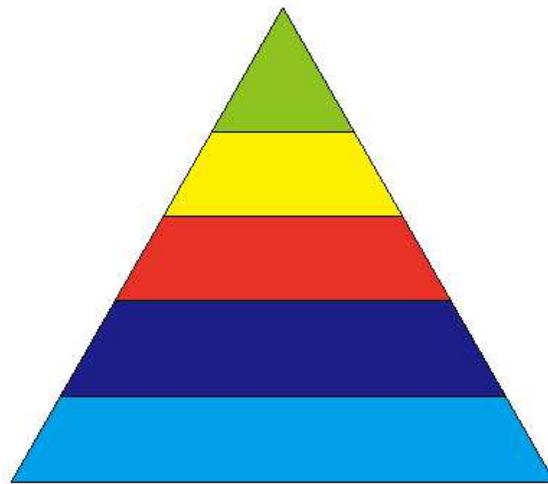
一般財団法人 日本学力検定協会

■ 法人概要

法人名	一般財団法人 日本学力検定協会
会長	岡部 恒治 (元日本数学協会副会長・埼玉大学名誉教授)
理事長	塩野 時雄 (株式会社学検・代表取締役)
設立年月日	平成8年4月1日
設立理念	大学受験指導、検定試験実施等を通じて、国家に有為たる人材の育成を図る。 生きがいのある社会を実現し、活力あふれる日本を築く。
事業内容	①高校経営コンサル・「学校内予備校」を設置し、「合格実績」を上げ、私学ランキングアップを実現。 *「学校内予備校」<朝日新聞デジタル・2013. 5. 27>等40社報道 ②人材育成、紹介・「読書力検定」を行い、合格者を一般企業へ推薦、紹介する。 日本初「中高大一貫教育」私塾を土呂駅前(さいたま市)にオープン。(2015. 2.2)
関連法人	日本グロービッシュ研究所(NPO法人グリーンイノベーション) 所長 橋本大二郎 (前高知県知事・早稲田大学大学院公共経営研究科客員教授 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特別招聘教授) 東京都新宿区高田馬場3-25-3 TEL 03-5332-6175 FAX 03-6908-9489
資産総額	1,150万円
社員数	80名 (パート含む)
取引銀行	三菱東京UFJ銀行 青山通り支店・埼玉りそな銀行 大宮支店
事務局	〒330-0805 さいたま市北区土呂町1-7-8 アイリスビル2F TEL 048-662-8250 FAX 048-662-8240 Email info-nihon@gaku-ken.com URL www.gaku-ken.com
<人材派遣>	特11-301573 <人材紹介> 11-ユ-300365

検定概要

オール論述回答



年3回(1.4. 8月)実施 (60点以上合格)

グレード	内容・所要時間	1次試験	2次試験	備考
3級	小5. 6 45分×1	① ②課題作文 100字-140字	ナシ	
2級	中2. 3 50分×3	①数学・理科 ②歴史 ③課題作文 180字-220字	フェルミ推定 思考力	
1級	高2. 3 ① 90分 ②、③ 60分	① 数学・理科 ② 歴史 ③ 小論文	フェルミ推定 思考力	

目的

- 埼玉県発「読書文化」を日本全国に向けて発信するために「読書力検定」を行う。
- 本検定には、次の3つの特徴がある。
- ① 都道府県の各新聞社を主催者とする。
- ② 日本全国の学習塾、予備校会社法人等を試験会場として実施する。
- ③ 検定合格者は、協賛企業へ推薦され、「就職」するチャンスが得られる。
- * 私学合格審査の「特典」になるよう働きかける。

実施方法

- 1. 出版社・課題図書選定 一試験ごとに当該級の書籍を「指定」してもらう

例・3級

出版社名	書籍名	著者名
岩波新書	なつかしい時間	長田 弘
同	物語もっと深読み教室	宮川健郎
同	農は過去と未来をつなぐ	宇根 豊
同	いのちをはぐくむ農と食	小泉 武夫
同	自分力を高める	今北 純一
同	ネツシーに学ぶ生態系	花里 孝幸
ポプラ社	りぼん	小川 糸
新潮社	あと少し、もう少し	瀬尾 まいこ
同	本当の環境問題	養老 孟司
筑摩書房	言葉の発達の謎を解く	今井 むつみ
同	町工場	小関 智弘
同	おはようからお休みまでの科学	古田 ゆかり
同	友だち幻想	菅野 仁
講談社	わかりあえないことから	平田 オリザ
集英社	世界地図の下書	朝井 リョウ
同	空をつかむまで	関口尚
同	約束	村上 由佳
徳間書店	神去なあなあ日常	三浦しおん
PHP研究所	ぜんぶ夏のこと	薫くみこ
角川書店	かんかん橋を渡ったら	あさのあつこ
文藝春秋社	聞く力	阿川 佐和子
同	奇跡	中村 航
平凡社	森林異変	田中 淳夫

2. 試験回数 年1回

(9月)私立高校文化祭 PM1:00~1:50

2:30~ビブリオ

3. 試験方法

① 要約文、課題作文

4. 試験会場

私立中、高等学校

5. 試験問題作成

指定図書から出題する本を選び、等級ごとに出題範囲を確定する。
文化祭実施日時が異なるので、4通り用意する。
2000円で添削し、返却する。

6. 試験内容

岩波新書、新潮社等

課題図書を指定する。出版社と提携する。検定問題を作成する。

7. 申込み

(学検)が、近隣の塾予備校、会社の申込受付。近隣の学校を試験会場指示

電子決済。PAYPAL

8. 受検会場（会社法人）

① 学習塾、予備校 塾生対象

指定図書は、いずれも中学、高校受験で出題頻度が高い作品である。
当該作品を月3冊程度読書すれば、読解力や語彙力の向上につながることを
アピールする。又、課題作文は、埼玉県公立高校ばかりではなく、ほぼ日本中の
公立高校の入試に出されている為、受験対策となる。

② 会社、職域 所属社員及び採用試験

読書に親しむことにより、教養企画力が高まる。又、文書作成能力も育成される。
会社ぐるみで検定試験を実施したい又は採用試験として実施したい会社を
募集する。

③〇〇市施設会場

学習塾や会社申込み以外の児童、生徒、大学生、一般人等は、〇〇市施設会場出受検する。

8. (一財)日本学力検定協会が中心となり、2級から3級まで作成する。

9. 問題配布

試験会場に試験問題を配布する。* PC配信

10. 実施

試験要項に基づいて、各会場で実施。2級(中学生)、3級(小学生)実施。

11. 返送

検定実施本部へ実施答案を返送してもらう。* 塾採点1000円

12. 採点、集計

1次合格は、塾が決定。

13. 結果

なぜ、要約力が必要なのか？〈養成ポイント〉

1.スピード化

情報収集を行い、取捨選択する。必要な事柄だけを事業戦略遂行のために役立てる。

2.コミュニケーションスキル

相手の主観や情報、データを論理的に捉える。相手の個性を知的に理解する力。

3.論理的思考力

おおまかな筋をつかみ、論点がどこにあるかを考える。論旨が一貫している文章を書く力。

4.複合的思考力

複数の情報を集約して独自の分析を行う。情報の背景を捉えて本質を追求する力。

5.情報の蓄積量が増大

情報をコンパクトにまとめて、記憶(記録)しておけば、引き出しが増えて、プレゼンの際などに活かされる。自分の言葉で理解してインプットする必要がある。

3級例題

Read the sentences which are so and write problem composition.

(1) these sentences, gather a point within 140 letter from 100 letter.

(2) write the idea by which it's you how to do within 140 letter from 100 letter to raise "the authority of the father".

The voice to which I wail over father's authority decline or the family's weakening is heard. But this isn't that it has started soon. When there is also similar argument in the high-growth period before half a century, the insistence by which we assume that the postwar constitution which gave a right of "householder" up is the cause also seems to have been strong.

On the other hand a social program isn't complete before, and because "house" carried almost all support of medical treatment and nursing as a kind of basic autonomous body, Mr. Michio Matsuda, the child-rearing critic writes Mr. Matsuda who wrote refutation of a gist as the---in which a patriarch was only strong inevitably (1996 and Iwanami new publication "my father vs. child") so more. Unless he'll say everyone stops endowment insurance (pension), health insurance and casualty insurance completely, and that takes over at a house, a father wouldn't recover the authority as the householder. Such thing can be done now, whether you shoulder? In other words, a social setup says to official Suke that the "person" who makes the paterfamilias the center became light as a complete outcome from self-help dry mutual assistance.

More politics are the situation that I should ask about the state of "the family" at which I aim already urgently, but the one which mixed and introduced asking before half a century is RA. A pension establishes universal care and everyone, and social security is maintained as well as the average number of people of the household has decreased. The one by which competition soon after time was about 5, 2014 is 2.36. Most, living alone accounts for 33% by the shape of the household. The one called "the trend toward the nuclear family" is a thing in front of Haruka, and "single person-ization" is developed rapidly at present. It's difficult whether it's thought social security responded to the flow an individual respects, and that was provided whether it was thought that substantiality of social security caused the family's reduction and dissolution with. There will be both sides.

A house mate means that he isn't here, and the family feels uneasy in the current state itself is, disappearing. While the social security expenses are increasing rapidly, the assertion to reduce "official Suke = wellbeing by public expense" and expand "self-help = the family's responsibility and burden" is also persuasive.

But when a hand of a clock should be returned simply, Mr. Matsuda doesn't seem to have thought "When a law turned back, a father wasn't rehabilitated." For example even if it was made nursing, "house" was taking senior

3級例題

1. 次の文章を読んで貴方の考えを書きなさい。

(1) この文章の要約を200字以内にまとめなさい。

(2) 日本の「掛け声文化」を他の国々に勧めたい、推奨文を220字以内で書きなさい。

(3) 「約束」について、どのように考えているか、貴方の考えを220字以内で書きなさい。

大事なとりきめなどのとき、私たちはよく口約束だけでは覚束ない気持ちになって、「書いたものにして下さい」という。声で発せられることばはその場で消えてしまうが、書いた文字はあとまで残るので、それを保存して証拠にしようということなのである。

いうまでもなく、いくら文字に書きつけてあっても、それを裏付ける人間の誠意がなければ、書いたものは文字通りの“空文”となるし、反古同然の紙切れにすぎない。古くから文字がこれだけ普及している日本でも、口約束、つまり声にすることばの力はきわめて大きい。欧米だったら同然契約書にサインするようなとりきめの何と多くが、日本社会では口約束で、双方あやしむことなく、事実支障なしに、すすめられていることか。本の執筆と出版のとりきめ、大学の非常勤講師の依頼などは、私のような仕事の者にとって、日常頻繁に経験する口約束だ。どちらも文書にする取りきめや依頼があとで行われることもあるが、口頭の、それもしばしば電話での話しあい、書いたもの以前に執筆や講義がはじまるのが普通である。

一方、たとえ文字で書いてあっても、それを生きた人間が声に出して発音することが求められる領域も随分多い。裁判の判決は、判決文をコピーして配れば済むのではない。書いたものを読みあげるだけにせよ、その資格をもった裁判長が、法廷という場で、声に出して言いわたすことが、判決が有効となるために必要なのだ。

宣誓、読経、祝詞— みな、声の力が文字を凌駕している。釈迦も孔子も、キリストもマホメットも、偉大な予言者、教示者は、声の力で聞かざる者の魂を変えた。声による教えを文字に書きとめたのは弟子たちだ。

声には、理性を超えて、人間の生理の最も奥深い層にまで、じかに届くような力がある。聞きわけがいい、聞きいれる、そりや聞こえぬなどという表現にも示されているように、「聞く」という行為には、声で発せられた指示の服従の意味がこめられている。文字に書かれたことばを、目で主体的、意志的にたどり、必要があれば途中で読むことをやめ、好きなだけ時間をかけて考えながら、理性によって理解するという行為とは、かなり人間の脳や神経の生理のメカニズムとしても違った行為なのである。私たちは言語というものを媒介として、声で発せられることばと、文字に書かれたことばとを、連続したもののように考えがちだ。そしてそれは、アルファベットなど表音性の大きい文字体系については、かなりの程度あてはまる。だが、漢字など表意性、図形記号性の大きい文字で書く、読むというはたらきとは、別の系統のものだということが、最近の脳神経生理学の実験的研究でも明らかにされてきている。音声言語によるコミュニケーションのできない失語症の患者でも、漢字を知っていれば、読み書きによるコミュニケーションが可能なのである。

文字はホモ・サピエンスの、それも人類全体の歴史からみれば、ごく一部分が用いているに過ぎないが、音声言語は人類に普遍的にあるし、分節の度合いはさまざまであるにせよ、声によるコミュニケーションは、人間以外の動物にも変えるやコオロギにいたるまでである。それだけ声は、人間だけのものでない、動物的というより生物的な基盤をもったコミュニケーションの媒体なのである。そして声は、功利性や伝達上の意味などを度外視して、もっと衝動的に、生々しく、「発せられる」ものでもある。応援に熱中して思わず発する叫び、好い気持ちで風呂にひたって、あるいは夜風に吹かれてひとり歩きながら、つい声になって出る歌。断末魔の叫び、性的興奮の絶頂感の中で発せられる声、宗教的エクスタシーから押し出される意味不明のグロツソリア。これらの声は、かなり動物的な次元のものともみなすことができるだろう。

逆に、本能的なようであるが、意外に文化によって条件づけられていると思われる声に、掛け声がある。これは日本やアジアの一部の社会で、武道、芸能、そして西洋渡来のスポーツにいたるまでの身体行動に伴って発せられるが、欧米やアフリカなど他の多くの人間社会にはない。

日本社会はとくに、掛け声にみちている。日本文化を「掛け声文化」といってもいいくらいだ。立ったり坐ったりするときも「どっこいしょ」という。野球やテニスの練習でも、ことばとしては聞きとれない叫び声を、みんなでお互いに発している。運動部のランニングでも、リーダーが一声高く「ハイター！」と叫ぶと、一同それをひきとって、走るリズムに合わせて、「ハイター、ハイ、ハイター、ハイ」とやる。これなども「ファイティング・スピリット」つまり闘志を意味する英語に由来する「ハイター」という日本語なのだが、もとの英語圏の国では、私も興味をもって訊ねてみたが、こういう現象はない。

祭礼のみこしかつぎからデモ行進にまで用いられる「ワッショイ」。武道各種の掛け声の大切さは言うまでもないが、芸能においても、能や歌舞伎のはやし方、義太夫の三味線や浪曲の曲師の掛け声。義太夫などは、三味線と三味線に、悪い間合いではげしく掛け声を入れられて、腸捻転を起こした太夫もあつたという。

日本社会に、これほど掛け声が発達している理由は何なのだろう。日本人は「緊張民族」といわれ、確かにリラックスすることが不得意で、緊張と真面目に大きな価値を与えてはいるが、それだけで説明できるものかどうか。声の文化に関心をもつ私にとっても今後の研究課題の一つだ。

はげしい緊張感の表出であるような掛け声だけでなく、投げ捨ての挨拶言語であるような掛け声も、日本の私たちの生活にはみちみちている。一家そろった食卓で、子どもたちが元気よく「いただきます」と口々に言って、われがちに箸をとる。これは挨拶というよりは、この声を発した者は食べ始めていたという、一種の掛け声だ。終わったときの「ごちそうさま」も、これを言った者は食卓を離れて遊びに行っているという、宣言にも似た掛け声であるといえる。「行ってまいります」「ただいま」も「行ってらっしゃい」「お帰りなさい」と必ずしも対になることを求めない、掛け捨ての声だ。挨拶言語は、人間関係がデリケートな社会ほどこみいって発達することが一般に認められるが、その一方で、日本社会は緊張感にみちた掛け声を必要とする社会なのだろう。挨拶と掛け声は日本でも連続しており、しかも現代の若者たちの中でもさかんに用いられていることは男女を問わず、高校や大学の運動部員が、学校の行き帰りに路上で出会ったとき発する、先輩後輩の区別のはっきりとした、あの異様な掛け声=挨拶によっても知ることができる。

約束事を書面にしたところで、相手に誠意がなければ、紙切れになってしまう。日本では、声にする言葉の力は極めて大きい。

2級例題

1. 次の文章を読んで、課題の小論文をまとめなさい。

(1) この文章の要約文を340字から400字にまとめなさい。

(2) 道徳心と商売について、貴方の考えを400字以内にまとめなさい。

わたしと同じ実業家の立場の人に「商業道徳」などというと、もしかしたら商業だけに道徳があるように聞こえてしまうかもしれない。しかし、道徳というのは世の中の人すべてが歩むべき道であるから、単に商人だけが持っていればよいというものではない。また、

「商業の道徳はこうである」

「武士の道徳はこうである」

「政治家の道徳はこうである」

と、官僚の制服が線の数で位を表しているように、別々に分けられているわけでもない。

人の歩むべき道であるからには、すべての人が守るべきものなのだ。

孔子の教えでいえば、

「親や目上の者を大切にすることは、仁という最高道徳を身につける根本である」

という言葉がある。親や目上を大切にする行いが、やがては社会の基本的な道徳へと大きく育っていったり、良心や思いやりを育っていったりするものなのだ。これは総称して道徳と呼ぶようになったのだろう。

ここでは、そうした広い意味での人の踏みべき道徳ではなく、商売において、特に輸出商売において注意すべき「競争の道徳」について述べておきたいと思う。わたしはこの点をみなさんとよく話し合っ、商売の決めごとを道徳的に固めておきたいと深く希望するのだ。

そもそも何かを一所懸命やるためには、競うことが必要になってくる。競うからこゝろ励みも生まれてくる。いわゆる「競争」とは、勉強や進歩の母なのである。しかしこれは事実である一方、「競争」には善意と悪意の二種類があるように思われる。踏み込んで述べてしまえば、毎日人よりも朝早く起きて、よい工夫をして、知恵と勉強とで他人に打ち克つていくというのは、まさしくよい競争なのだ。しかし一方で、他人のやったことが評判がよいから、これを真似してかすめ取ってやろうと考え、横合いから成果を奪い取ろうとするのは悪い競争に外ならない。

ただし、簡単に善悪二つに分けられるにせよ、そもそも事業にはさまざまあって、競争の種類もいくつもある。そのなかで性質が善でない競争に携わった場合、状況によっては利益が転がり込んでくることもあるだろう。しかし多くの場合は他人を妨害することで、やがて自分の損失にもつながってしまう。さらに自分や他人という関係ばかりでなく、その弊害が国家に及んでしまうこともある。「日本の商人は困ったものだ」と外国人にまで軽蔑されるようになれば、その弊害はとて大きいといわざるを得ない。

今集まりのみなさんは、もちろんそのようなことはないと思うが、万一のことを考えて、ここでは老婆心を述べさせて頂いている。どうも世間には、押し並べてこのような弊害が多いとも聞く。特に雑貨輸出などの商売において、悪い意味での競争、つまり道徳に欠ける行いが他人を傷つけて、自分の損失ともなり、国家の品位まで落としてしまっている。 商工業者の地位を高めようとしてお互いに努力してきたはずなのに、なぜか反対に低めることになっている。

では、どのような経営をすればよいのか。事実立脚しないと、こういうことははっきりとはいえないものだが、わたしは善意の競争に努めて、悪意の競争を避けるということがよい、と思っている。悪意の競争を避けるというのは、こういうことだ。お互いが商業道徳を尊重するという強い意志を持っていれば、いくら自己開発に努めていったとしても悪意の競争に陥ることはない。どの一線を越えてはならないかというのは、『バイブル』を読んだり、『論語』を暗誦しなくとも、必ずわかるものだろう。

もともとこの道徳というものをあまりむずかしく考えてしまい、東洋の道徳でよく見られるように、格式ばった文字を並べ立てていると、道徳が茶の湯の儀式のような形骸化に陥りかねなくなる。一種の唱え言葉になって、道徳を説く人と、道徳を行う人とが別になってしまうのだ。これでははなはだ不都合ではないか。

そもそも道徳は、日常のなかにあるべきことで、ちょっと時間を約束して間違えないようにするのも道徳なのだ。また、人に対して譲るべきものは相応に譲るのも道徳である。またあるときは、人に先んじて人に安心感を与えるのも道徳にある。何かをするのに弱者を助ける心を持たなくてはならないのも、道徳なのだ。

このようにちょっと品物を売るというだけでも、道徳はそのなかに含まれている。だから道徳というものは、朝から晩までついてまわってくるものなのだ。ところが、道徳をとてむずかしいもののように見なして、日常の道徳を隅の方に追いやり、

2級例題

「さて今日から道徳を行うぞ」

「この時間が道徳の時間だ」

といったように仰々しくやろうとする場合がある。そんな億劫なものではないのだ。

もし商工業において「競争の道徳」なるものがあつたなら、何度も繰り返している通り、善意の競争と悪意の競争というものを考えなければならない。妨害によって人の利益を奪う競争であるなら、それは悪意の競争というのだ。一方で、品物を徹底して選びぬき、他の利益を奪うようなことをしないのが、善意の競争なのだ。この二つの境界線は、どんな人でも自分の良心に照らし合わせてみれば、わかることだと思う。

要約すれば、どんな仕事にもかかわらず、商売には絶えざる自己開発が必要なのだ。また、気配りも続けなければならない。進歩はあくまでしていかなければならないがそれと同時に悪意の競争をしてはならないことを、強く心に留めておかなければならない。

現代の実業界の傾向を見ていると、ときに悪徳重役のような人物が出て、株主から託されている資産をまるで自分のもののように心得て、好き勝手に運用して自分の利益にしようとする者がいる。そのため会社内部は伏魔殿のようになってしまい、公私のケジメなく秘密の行動が盛んに行われるようになっていく。これは実業界にとって本当に嘆き悲しむべき現象ではあるまいか。

もともと商業は、政治と比較すれば、機密など持たなくても経営していけるはずのものであろうと思う。ただし、銀行においては、事業の性質としてある程度は秘密を守らなければならないことがある。たとえば、誰にどれくらいの貸付があるとか、それに対してどのような抵当が入っているといったことは、社会道徳のうえから秘密にしておかなければならないことだろう。

また、一般の商売においても、いかに正直を旨としなければならないとはいえ、この品物はいくらで買い取ったもので、今この値段で売ることからこれくらいの利益になる、といったことをわざわざ世間に公表する必要もあるまい。要するに不当なことさしなれば、道徳の上で必ずしも不都合な行為にはならないと思うのだ。しかしこのような事例以外で、今あるものをないといい、ないものをあるというような、単なる嘘をつくのは断じてよくない。正真正銘の商売には、基本的には機密などといったものはないと見てよいだろう。

ところが社会を実際に見てみると、会社になくともよいはずの秘密があつたり、あつてはならないところに私的行為があるのは、どのような理由によるものだろう。わたしはこれを、「重役にふさわしい人材がない結果だ」といい切るのに躊躇しないのである。

つまり、このわざわいのもとは、なかなか容易ではない。現在でも重役としての腕前に欠けているのに、その地位についている人が少なくない。

たとえば会社の取締役や監査役といった名前を売って、ひまつぶし的手段に名前を連なる「虚栄心のための重役」とでもいうべき輩がいる。彼らの浅はかな考え方は軽蔑すべきものだがそれ自体たいした欲求ではないので、それほど罪悪を重ねる心配はない。

他には、好人物だけれども、その代わりに事業経営の手腕がない者もいる。そういう人が重役だと、部下の人物の善悪を見分ける能力もなく、帳簿を読み取る眼力もない。そのために知らず知らずのうちに部下が過ちを重ね、自分から作った罪でなくても、結果として救うことのできない窮地に陥ってしまうことがある。これは前者に比べるとやや罪は重いが、しかしいずれも重役としてわざと悪いことをしたのではないのは明らかだ。

ところが、この二者より、一步進んで悪に踏み込む者がいる。その会社を利用して、自分の出世のための踏み台にしようとか、私利私欲のための手段にしておもうと考えて重役になる者だ。これは、まったく許すことのできない罪悪だ。

さらにこういった人間は、こんな手段を使うことがある。株式相場をつり上げておかないと都合が悪いといって、実際にはない利益をあるように見せかけ、虚偽の配当を行う。また、実際には払い込んでいない株のお金を払い込んだように見せかけて、株主の目をくらまそうとする。これらのやり方は明らかに詐欺行為だ。

さらに、彼らの悪事の手段はそれくらいでは終わらない。その極端な例では、会社の金を流用して投機をやったりとか、個人の事業に使ってしまったりする。これではもはや窃盗と変わらない。結局このような悪事は、その職責を担う者が道徳を身に着ける努力をしていないために起こる弊害なのだ。もし、その重役が誠心誠意、その事業に忠実であるならば、そんな間違いは起こしたくても起こせないはずだ。

渋沢 榮一「論語と算盤」